

第11回

平日の 午後のコンサート。

10.1 (月) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Mon. October 1, 2018, 14:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

〈ヴァイオリンの世界へ〉

Welcome to the Violin's World

指揮とお話 渡邊 一正

Kazumasa Watanabe, conductor & speaker

ヴァイオリン 大谷 康子*

Yasuko Ohtani, violin *

コンサートマスター 依田 真宣

Masanobu Yoda, concertmaster



ロッシニー: 歌劇『ウィリアム・テル』序曲 (約13分)

Rossini: "William Tell" overture (ca. 13 min)

モンティ: チャールダーシュ * (約4分)

Monti: Csardas * (ca. 4 min)

マスネ: タイスの瞑想曲 * (約5分)

Massenet: Meditation Thais * (ca. 5 min)

J.S. バッハ: G線上のアリア(管弦楽組曲 第3番 二長調 BWV1068
より第2曲「アリア」) * (約6分)

J.S. Bach: Air on the G String * (ca. 6 min)

サラサーテ: ツィゴイネルワイゼン * (約6分)

Sarasate: Zigeunerweisen (ca. 6 min)

— 休憩 (約15分) —

ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 op.92 (約35分)

Beethoven: Symphony No. 7 in A major, op.92 (ca. 35 min)

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan



10/1

渡邊 一正 指揮とお話

Kazumasa Watanabe, conductor & speaker

東京フィルハーモニー交響楽団レジデント・コンダクター。広島交響楽団正指揮者、東京フィルハーモニー交響楽団指揮者を歴任。NHK交響楽団をはじめ、日本国内の主要オーケストラへ定期的に客演している。オペラ、バレエでは新国立劇場で歌劇『友人フリッツ』、同劇場バレエ団『白鳥の湖』『くるみ割り人形』『ドン・キホーテ』などを指揮。また、海外でもサンクトペテルブルク交響楽団定期演奏会に客演するなど、活躍している。

ピアニストとしても、8歳の時に東京交響楽団、東京フィルと共演。ハンス・ライグラフ教授に師事。オーケストラと弾き振りを含むプログラムを行うなど、ピアニストとしての才能も評価されている。



©満田 聡

大谷 康子 ヴァイオリン

Yasuko Ohtani, violin

今年デビュー43周年を迎え、1708年製(310周年)ピエトロ・ガッルネリでの深く温かい演奏は「歌うヴァイオリン」と評される。国内外でのオーケストラとの共演をはじめ、コンサート、チャリティー、教育活動、BSジャパン(毎週土曜朝8時)「おんがく交差点」で司会・演奏を務めるなど、人気・実力ともに日本を代表するヴァイオリニストのひとり。CDも多数。今年7月、自身初の著書『ヴァイオリニスト 今日走る!』(KADOKAWA)を発売。

文化庁「芸術祭大賞」受賞。東京音楽大学教授。東京藝術大学講師。(公財)練馬区文化振興協会理事長。川崎市市民文化大使。高知県観光特使。(公財)日本交響楽振興財団理事。

ホームページ <http://www.yasukohtani.com>



©Masashige Ogata

10/1

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

10/1

ヴァイオリンとオーケストラの名曲に酔う!

今回の「平日の午後のコンサート」は、〈ヴァイオリンの世界へ〉。日本を代表する名奏者・大谷康子が、おなじみの名作を披露します。登場するのは“人気の小品ベスト4”ともいえるナンバー。『チャールダーシュ』と『ツイゴイネルワイゼン』では、ジブシー・ヴァイオリンの流れを汲む濃厚な節回しや、速弾きをはじめとする超絶技巧を、『タイスの瞑想曲』と『G線上のアリア』では、じっくり歌われるピュアな旋律美や、繊細で伸びのあるヴァイオリンの特性を堪能することができます。これらを、「歌うヴァイオリン」と評される大谷がいかに聴かせてくれるのか? 大いに注目しましょう。

指揮は、東京フィルのレジデント・コンダクター、渡邊一正。オーケストラのみで演奏される『ウィリアム・テル』序曲、ベートーヴェンの交響曲第7番も、最上位の人気を誇る作品です。今回は、明快なタクトと表情豊かなソロで紡がれるポピュラー名曲の世界を、存分に満喫しましょう。

10/1



東京フィル レジデント・コンダクター就任4年目を迎えたマエストロ渡邊一正

©Hikaru.☆

天才ロッシーニ、37歳の傑作ウィリアム・テルの英雄劇

イタリア初期ロマン派オペラの大家ジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)の歌劇『ウィリアム・テル』序曲で幕を開けます。ロッシーニは、37歳時の1829年にパリで初演された本作で、40本近いオペラの創作を終え、残る約40年の人生は、宗教曲や小品を作曲しながら悠々自適で過ごしました。このオペラは、スイスの独立を勝ち取る勇敢な人々を描いた、シラー原作の英雄劇。主人公が息子の頭に乘せたリンゴを矢で射る場面で有名なお話です。ただし長大な全曲はあまり上演されず、序曲だけが断然の支持を得ています。

曲は、物語に沿った4つの部分から成る小交響曲のような構成。第1部「夜明け」(各タイトルは通称)は、独奏から五重奏に発展するチェロを中心に、スイスの夜明けが描かれます。第2部「嵐」は、全楽器による激しい描写。フルートの小鳥のさえずりを経て、第3部「静けさ」へ移り、イングリッシュ・ホルンが美しい牧歌を奏でます。第4部「スイス軍の行進」は、ファンファーレに始まる歯切れよい行進曲。畳み掛けるように高揚する有名な音楽です。



ロッシーニ
(1792-1868)

“酒場風”を意味するハンガリーの『チャールダーシュ』

ここからはヴァイオリンの名曲集。まずはヴィットーリオ・モンティ(1868-1922)の『チャールダーシュ』です。モンティは、意外にもイタリアのヴァイオリニスト兼作曲家。しかも本作は、自身が率いるマンドリン楽団用のナンバーです。しかしその曲調からジプシー楽団の定番となり、さらにはクラシック演

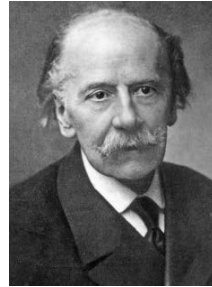


モンティ
(1868-1922)

奏家の愛奏曲にもなりました。チャールダーシュとは「酒場風」の意味。居酒屋（チャールダ）における兵士募集の踊りが発展したハンガリーの民俗音楽です。曲は、ラッサンと呼ばれる哀愁を帯びた遅い部分と、フリスカと呼ばれる急速な部分が対比される形。速弾きでおなじみの後者は、爽快感満点です。

歌劇『タイス』より、ヒロインの心を描いた名曲

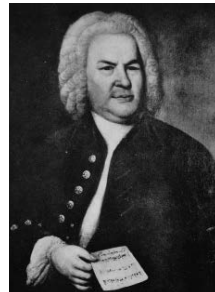
おつぎは、フランス・ロマン派オペラの代表格ジュール・マスネ(1842-1912)の『タイスの瞑想曲』。本来は1894年に初演された歌劇『タイス』の第2幕の間奏曲です。本編は、悦楽の生活に耽る古代エジプトの遊女タイスが、若く敬虔な修道僧アタナエルの教えで信仰に目覚め、アタナエルは逆にタイスに惹かれて堕ちていくといった物語。この曲は、信仰の道へ移らんとするタイスの心を暗示したピュアな音楽です。分散和音に乗ってヴァイオリンが甘美なメロディを歌い、中間部では熱っぽさを加えます。



マスネ(1842-1912)

「音楽の父」J.S. バッハの“エア=歌”

代わっては、ドイツ・バロック音楽の大家ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)の『G線上のアリア』。この曲も本来は、1730年頃に書かれたとみられる『管弦楽組曲第3番』の第2曲「エア」(=アリア。つまり「歌」の意味)です。これを19世紀後半の大ヴァイオリニスト、ヴィルヘルミが、ヴァイオリンの最低弦のG線だけで演奏するように編曲したのが『G線上のアリア』。その後様々な形態で単独演奏されています。静かに刻まれる低音の上で、しみじみとした旋律が奏されていく、心に染み入る名曲です。



J.S.バハ
(1685-1750)

ヴァイオリンの名手サラサーテの代名詞

ヴァイオリン作品の最後は、パブロ・デ・サラサーテ(1844-1908)の『ツィゴイネルワイゼン』。19世紀屈指のヴィルトゥオーゾ・ヴァイオリニストとして名を馳せたサラサーテは、自身の演奏会のために、出身地のスペイン情趣に溢れた小品を数多く作曲しました。それらを代表する本作は、1878年に出版された1曲。タイトルは、ドイツ語で「ジブシーの歌」を意味しています。野趣と哀感に充ちた音楽で、以下の3部分が続けて演奏されます。第1部はモデラートーレント。憂いに充ちた旋律が、技巧的なフレーズを交えながら、たっぷりと奏されます。第2部はウン・ポーコ・ピウ・レント(今までよりやや遅めに)。弱音器を付けたヴァイオリンが甘く切なく歌います。第3部はアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。超絶技巧を要する情熱的な終結部です。



サラサーテ
(1844-1908)

ベートーヴェン×リズム×反復×高揚=傑作!

後半は、ウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲第7番。ベートーヴェンは1曲ごとに新機軸を盛り込んだ渾身の交響曲を9曲残しました。第7番は、その中でも人気の高い作品。創作中期後半の1811~13年に作曲され、1813年12月、ウィーンにおける「戦争傷病兵のための慈善コンサート」で公開初演されました。ナポレオン軍に対する戦勝ムードの中で行われた当公演は、サリエリやフンメル等の著名音楽家を含む100名の大オーケストラが演奏したイベント的なコンサート。明快でビートの効いた第7番はタイムリーな音楽ゆえに、生涯屈指の大成功を収めました。



ベートーヴェン
(1770-1827)

本作でベートーヴェンが打ち出したのは“リズムの徹底強調”。各楽章に設けられた固有のリズム・パターンを主軸に、全曲が構成されています。アダージョやアンダンテといった純粹な緩徐楽章を欠くのも大きな特徴。さらには、第5&第6番の拡大路線から、トロンボーン等を用いないベーシックな2管編成に戻り、第4番以来となる第1楽章の序奏も復活しました。これらは、古典的形態の中で清新な音楽を創造するチャレンジゆえの発想とみなされています。実際、ハイドンやモーツァルトの交響曲と変わらない編成でもたらされる迫力と高揚感は、驚きというほかありません。

第1楽章：ポーコ・ソステヌートーヴィヴァーチェ。長い序奏の後、「ターン・タタン」の基本リズムに基づく軽快な第1主題と明るい第2主題を中心に、熱狂的な盛り上がりを見せます。

第2楽章：アレグレット。「タータタ・ターター」のリズムが全編に亘って奏される、哀愁を帯びた音楽。「不滅のアレグレット」とも呼ばれる名楽章で、初演時にはアンコール演奏されました。

第3楽章：プレスト。「スケルツォ」にあたる楽章。「タタタ・タタタ」の3連音を基本リズムとする弾んだ主部に、民謡風の伸びやかな主題をもつトリオ(中間部)が2度挟まれます。

第4楽章：アレグロ・コン・プリオ。冒頭の「タンタタタン」をはじめとする複数のリズム動機が登場。開始直後の主題を中心に、圧倒的な狂乱状態が生み出されます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。